

令和5年度「ICTを用いて創造し、表現する学び」に関する調査・研究

東大阪市教育センター 調査・研究チーム
宝 淳一郎 谷口 理志 景山 功嗣

【要 約】

令和4年度の調査・研究の検証結果を踏まえ、「ICTを用いて創造し、表現する学び」と児童生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の関連について明らかにするため、調査・研究を行った。市内2校の協力校と共同し、定義に沿った実践を通して、児童生徒の学びの姿や成果物、児童生徒への単元前・単元後のアンケート調査の結果から、児童生徒が「粘り強さ」と「自己調整」力を発揮しながら学びに向かう「主体的に学習に取り組む態度」の向上、さらには、知的好奇心等の非認知能力をも育てていることを実証することができた。このような学習経験の積み重ねは、子どもたちが予測困難な未来社会の中で課題に立ち向かい、前に踏み出そうとする推進力となっていくだろう。

【キーワード】 ICT活用 ルーブリック 相互評価 自己評価 主体的に学習に取り組む態度 非認知能力

1 はじめに -調査・研究の趣旨-

東大阪市では、「ICTを活用した教育の推進に関する基本方針（令和2年11月 東大阪市教育委員会）」において、「新しいICT環境で進める教育がめざすもの」として「個別最適な学び」「つながり互いに高め合う学び」「ICTを用いて創造し、表現する学び」の3つを基本方針として示した。「VUCA」と呼ばれる予測不可能な社会変動の中で、子どもたちが、よりよい未来を求めて自ら学び、あらゆる他者ととも新たな生き方や社会を創造していく資質・能力を身に付けられるよう、子どもが主体的に学習に取り組む、学びへの転換を推進するためである。

令和3年度より、市立小中学校の全児童生徒に1人1台端末としてiPadを貸与し、授業での活用が本格的にスタートしたことから、東大阪市教育センターでも、ICTの日常的な活用や目的を明確にした授業等での活用について、研修や訪問指導の指導助言において市内への拡充を図った。教科等の授業の中で、子どもたちが、紙のワークシートかICTかを自分で選択して「個別最適」に活用する場面や、アプリの共有機能を使った発表や意見交流を通して「つながり互いに高めあう」場面など、ICTを用いた学習の在り方が見え始

めてきた。しかし一方で、令和3年度末に市内の教職員を対象に実施した「新しい学びのイメージの定着」に係る調査では「創造し、表現する学び」を「日々の授業で実践している」と回答した教員は13.1%の数値にとどまっていた。

そこで、教育センターでは、令和4年度より「調査・研究」のテーマを「ICTを用いて創造し、表現する学び」とした。図1は、令和5年度に「東大阪市がめざすこれからの学び」を再整理したものである。令和5年度は、令和4年度の検証結果を踏まえ、「創造し、表現する学び」の授業構想や実践検証を通して、子どもに育める資質・能力の可能性を探り、教育の推進に係る調査・研究を進めた。



図1 「東大阪市がめざすこれからの学び」

2 「ICT を用いて創造し、表現する学び」の定義

令和4年度の調査・研究を進めるにあたり、「ICT を用いて創造し、表現する学び」とはどのような学びなのかを明確にしておく必要があった。そこで、東大阪市教育センター内で意見を交流し、次のように定義付けた。

「感じたことや考えたことを自分なりに表現^(※i)
し、よりよく課題を解決する^(※ii) 学習を通して、
アイデアをかたちにする力^(※iii) を育む学び」

参考にした主な文献等は次のとおりである。

(※i) 文部科学省『幼稚園教育要領(平成29年告示)』
(※ii) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)』
(※iii) ミッチェル・レズニック(2018)『Lifelong Kindergarten』日経BP社

これらの参考文献に基づいた定義の概要については、令和4年度の調査・研究に関する研究紀要(2022谷口ら)に詳しいので参照されたい。概ねは、次のとおりである。

ミッチェル・レズニック氏は、著書(2018)において「幼稚園の子供たちは、スパイラルを繰り返すにつれて、創造的思考者としての能力を高め、洗練して」おり、「彼らは自分のアイデアを掘り起こし、それを試し、代替案で実験し、他の人から意見を得て、自分の経験に基づいて新しいアイデアを生み出すこと」を学んでいるのだと述べている。そして、「創造的思考者として人びとが成長することを助ける手段を考えてきたとき、そのインスピレーションの多くは、子供が幼稚園で学ぶ方法から生まれた」ものであり、「幼稚園スタイルの学びこそが、急速に変化する今日の社会で活躍していくために必要な創造力を、あらゆる年齢の人々が育むために必要なものであると確信している」と明言している。

このミッチェル・レズニック氏の研究成果に基づき、「創造し、表現する学び」において子どもたちに付けたい力を「アイデアをかたちにする力」と定義した。

そして、この力を育む学習として、『幼児教育要領』の「表現領域」に着目し、「幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにする」ことで「感じたことや考えたことを自分なりに表現」することを重視し、第一行目で示した。

また、この力は、予測不可能な未知の状況において、「解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題」に直面した際にこそ発揮されなければならない。そこで、『小学校学習指導要領』の「総合的な学習の時間(1)目標」にある、「よりよく課題を解決」しようとする自覚的・意識的な粘り強い学びであることを、第二行目に示した。

この定義の意義を教育センター内で共有し、定義に沿った単元の構想と実践検証を通し、調査・研究を進めることとした。

3 令和4年度 調査・研究の成果と課題

令和4年度の調査・研究の概要は次の通りである。

【研究仮説】

「ICT を用いて創造し、表現する学び」を行えば、児童生徒の教科等学習への興味・関心・意欲が高まる。

【調査・研究 研究員】

- ・ 市立小学校教諭7名
- ・ 市立中学校教諭3名 計10名

【研究方法】

- ・ 研究員による、教科・単元にて定義に基づいた「ICT を用いて創造し、表現する学び」の実践
- ・ 単元前および単元後に「興味・関心・意欲」に関する児童生徒へのアンケートの実施

令和4年度の調査・研究に関する研究紀要(2022谷口ら)では、その成果と課題について次のような見解を述べている。

「ICT を用いて創造し、表現する学び」を行えば、児童生徒の教科等学習への興味・関心・意欲が高まることが明らかになった。しかしながら、今回は、特定の学年・教科における調査・研究であった。今後、「ICT を用いて創造し、表現する学び」を市内に普及させるためには、例えば学校全体で研究を行う等、スケールアップした調査を行う必要があると考えられる。（中略）そして、児童生徒において、初めて出会うアプリや表現方法に主体的に関わっていける知的好奇心や探究心等の非認知能力の向上は不可欠である。これは幼児教育において大切にされている要素であり、（中略）幼児教育で大切に育まれてきた非認知能力も同時に育成していくことが肝要であると考えられる。

単元学習後のアンケート結果から、「楽しかった」「興味をもって取り組んだ」という項目の肯定的回答が上昇していたことから、研究仮説に対する一定の効果が実証できたと言える。一方で、授業改善を推進し、市内への普及を図るには調査・研究対象を学校単位で行うこと、また、内容についても、子どもの「興味・関心」のみではなく、知的好奇心や探究心をゆさぶり、子どもの主体性が育まれることをめざした学びの転換を図ることができるよう、調査・研究を進めることが次の展望であったと言える。

そこで、令和5年度の調査・研究を次のように進めることとした。

4 令和5年度 調査・研究の概要

(1) 研究仮説

令和4年度の検証を踏まえ、令和5年度の研究仮説を次のように設定した。

「ICT を用いて創造し、表現する学び」を行えば、「**主体的に学習に取り組む態度**」が向上する。

「学習評価の在り方ハンドブック」（文部科学省 国立教育政策研究所 令和元年6月）には、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、「知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付

けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面（①）と、①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面（②）、という二つの側面から評価することが求められる。」と示されている。これは、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（中央教育審議会 平成31年1月21日）において、「『関心・意欲・態度』の観点の評価は、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉えることであるような誤解が払拭し切れていない」ことが指摘されたことを受けている。

先に述べたように、令和4年度の東大阪市教育センター調査・研究では、子どもたちが各教科等の学習内容に「興味・関心」をもって取り組んだことを検証することができた。一方で、「ICT を用いて創造し、表現する学び」の定義に沿った学習では、子どもたちが「自分なりに表現し、よりよく課題を解決」する学習過程において、よりよい表現を「①粘り強く」試行錯誤したり、課題の目標と自らの学習を振り返りながら「②自己調整」したりする力を、否応なく発揮せざるを得ない場が設定されているはずである。

令和5年度は、教科等の、あるいは教科等の枠を越えた総合的な学習として「ICT を用いて創造し、表現する学び」の定義に沿った単元をデザインし、いかに子どもたちの知的好奇心や探究心を揺さぶり、「主体的に学習に取り組む態度」の向上を図ることができるか、また、知的好奇心等の非認知能力がいかに育まれるかを評価することに焦点を当てた実践効果の検証を試みた。

(2) 単元の学習前後のアンケート項目

「ICT を用いて創造し、表現する学び」と、児童生徒の単元学習への「主体的に学習に取り組む態度」の関連を明らかにするための指標として、単元前及び単元後に児童生徒へのアンケートを実施した。

アンケート項目は、東大阪市教育センターで協議し、粘り強さに関する項目3問、自己調整に関する項目3問、合計6問を設定した。項目内容は次の通りである。

【単元前】「普段の学習では・・・」 / 【単元後】「この単元の学習では・・・」	
粘り強さ (グリット)	①解決したいことや身につけたい力を意識して学んでいますか。/学びましたか。
	②難しいことがあっても投げ出さず、最後まで努力していますか。/努力しましたか。
	③考え方や表現方法がいくつか思いつくとき、どれがより適切かを判断していますか。/判断しましたか。
自己調整	①友だちの意見を参考にしながら、自分の考えをまとめたり深めたりしていますか。/まとめたり深めたりしましたか。
	②自分で学習の進め方について確認していますか。/確認しましたか。
	③学んだことに対して、他の表現方法がなかったか考えたり、疑問点などを見つけたりしていますか。/見つけたりしましたか。

(3) 調査・研究 協力校

調査・研究を学校単位で行うにあたり、東大阪市 学校教育推進室 教務学力向上パートと連携し、当課室の担当事業である「学力向上フラッグシップ校」の「授業改善」指定校に依頼することとした。

令和5年度の調査・研究協力校は、次の2校である。

【協力校Ⅰ】東大阪市立玉川中学校
【協力校Ⅱ】東大阪市立森河内小学校

令和4年度の課題を踏まえ、学校単位での授業改善を推進し、市内への一層の普及を図ることをねらいとする。そのため、協力校との連携にあたっては、授業者と教育センター担当者が直接やりとりするのではなく、校長を中心とした、学力向上支援コーディネーター、授業改善推進担当、ICT担当等、校内の授業改善を推進する立場の教員を窓口に進めた。

(4) 調査・研究の年間計画

1年間を大きく3段階のステージで捉え、次のように計画・実施した。

【ステージ1 (主に1学期)】
目標 1回目の授業実践と省察を行い、調査・研究の方向性を共有する。
<ul style="list-style-type: none"> 第1回校内研修を実施 (調査・研究の概要を共有) 実践① 計画・実践・アンケート調査 第2回校内研修を実施 (実践①の成果と課題を共有)
【ステージ2 (主に2～3学期)】
目標 校内で複数の学年・教科による2回目の授業実践と省察を行う。
<ul style="list-style-type: none"> 実践②に取り組む学年決定 実践② 計画・公開授業・アンケート調査 実践②の成果と課題を共有
【ステージ3 (主に3学期)】
目標 年間総括を行い、実践報告を市内へ普及・発信する。
<ul style="list-style-type: none"> 東大阪市教育フォーラムでの実践報告 第3回校内研修等 (実践②の成果と課題を共有)

実践と検証を往還し、見出した成果と課題を教育センターと協力校が共有する。さらに、協力校での校内研修を通して校内に広げることで、協力校全体で調査・研究を進めることをねらいとしている。

5 調査・研究協力校の実践Ⅰ

－ 東大阪市立玉川中学校 －

(1) 校内研究テーマと調査・研究の関わり

玉川中学校は、令和5年度の校内研究テーマを「効果的なパフォーマンス課題を用いた思考力・判断力・表現力等の育成と学習道具としてのタブレット端末活用への挑戦」として取り組まれた。知識や技能を「知っている」、「分かる」で留まらず、「使える」学力に

するためには、思考力・判断力・表現力等の育成が必要かつ不可欠であると感じられたためである。そして、思考力・判断力・表現力等を育成する手立ての1つとして、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求める「パフォーマンス課題」の設定を学校全体で取り組むこととされた。

このパフォーマンス課題を組み込んだ単元学習の過程でタブレット端末を活用する場面を設定し、「ICTを用いて創造し、表現する学び」の定義に沿った単元を構想して実践することで、調査・研究を共に進めることとした。

(2) 学習単元の概要

玉川中学校が「ICTを用いて創造し、表現する学び」の調査・研究として実践した単元は次の4つである。

【ステージ1 (1学期)】

《実践①》 中学3年 国語科

「沖縄修学旅行記に添える思い出の俳句を作ろう」

【ステージ2 (2学期)】

《実践②-1》 中学1年 理科

「気体のキャラクター図鑑を作ろう」

《実践②-2》 中学2年 家庭科

「和食のすばらしさを、世界の人々に紹介しよう」

《実践②-3》 中学3年 社会科

「PRムービーで東大阪の魅力を発信しよう」

これらの「ICTを用いて創造し、表現する学び」の単元学習の過程において、生徒の「主体的に学習に取り組む態度」がいかに発揮されたのか。ここでは《実践①》を例に、実践の実際と、生徒の作品や振り返りをベースに検証したい。

(3) 《実践①》の実際と生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の考察

本実践①は、調査・研究年間計画の【ステージ1】に位置する。玉川中学校の授業改善推進担当者自らが授業者となって先行実践として取り組んだ。沖縄での

修学旅行を題材に、写真を1枚選んで俳句で詠み、ICTを使って創作する学習単元である。修学旅行の体験を記した「沖縄修学旅行記」の中に、自分が詠んだ俳句を組み入れることで、紀行文として完成させる。修学旅行の目標とも関連づけた教科等横断的な学習単元であるとも言える。

まずは、この学習単元を「ICTを用いて創造し、表現する学び」の定義に沿って、次のような学びを期待するものであるとして、授業者と共有した。

沖縄修学旅行での平和学習や自然体験等での学びを通して「感じたことや考えたこと」を、思い出の写真を選び、言葉を練った俳句を付けて「自分なりに表現」する。修学旅行記を読み返した時に、平和への願い、楽しかった思い出などが蘇ってくるような旅行記にするには、写真にどんな言葉を付けて俳句で表現すればいいだろうかと「よりよく課題を解決する」学習を通して、「アイデアをかたちにする学び」である。

この定義に沿った単元を実践する上で授業者が工夫したのが、生徒がICTを用いて俳句を創作する際、国語科の「見方・考え方」を働かせて言葉や表現技法を工夫できるよう評価指標（ルーブリック）を示して生徒と共有したこと、さらに、言葉を試行錯誤して「よりよく」「アイデアをかたちにする」仕掛けとして、ルーブリックを使って生徒どうして相互評価する場を単元の途中で設けたことである。



【写真①】

【写真①】は、ルーブリックをもとに相互評価をした後、自分の伝えたいことを表すもっとよい言葉がないか、ICTを用いて再思考している生徒の姿である。この

生徒は、はじめに俳句を作る時、言葉をブレインストーミングする手段として思考ツールの「Xチャート」を使い、自分が選んだ思い出の写真から、聞こえてく

る音や声、場所、人、様子を表すオノマトペや形容詞・形容動詞など、言葉を書き出していた。クラスメイトと相互評価をした後、改めて自分の俳句を読み直し、もっとよい言葉がないかを考える際に、最初に書き出した「Xチャート」に立ち返ったのである。修学旅行での思い出をよりよい俳句で表現したいという目的意識をもち、粘り強く言葉を探し、取り組んでいる姿であると言える。

【写真②】は、言葉を再思考した後、俳句を練り直して写真に入れ込み、自分なりの作品として仕上げようとしている生徒の姿である。俳句の言葉を変えてみたり、



【写真②】

語順を入れ替えてみたり、あるいは、写真そのものを替えてみたりしながら、自分が選んだ思い出の写真と俳句の言葉が関連づき、自分の表現したいことが伝わる俳句になっているだろうかと思いを働かせている。「試す」ことと「見直す」ことを何度も繰り返し、自己調整している姿であると言える。

さらに、授業者は、生徒自身が俳句で何を表したいか、そのために、どんな言葉を使って工夫したのか、表現者としての自分自身を振り返って言語化する活動、いわゆる「メタ言語」を書く学習活動を取り入れた。次に挙げているのは、実際の【生徒作品A】【生徒作品B】である。

【作品A】の生徒は、シュノーケリングでの体験を俳句で表すのに、「シュノーケリング」という言葉を直接使うことを避けたいと考え、言葉を置き換えている。また、言葉と五感を関わらせて考えることで、自分の俳句に相応しい言葉を選ぼうとしたことを述べている。

【作品B】の生徒は、マリン体験の中で「みんなで、全力ではしゃいだ」思い出を「俳句に残し」たいという目的意識をもって創作に臨んでいる。「夢中になって遊んでいた自分の思いをよりの確に表す言葉は何か、再思考したことが伺える。

【生徒作品A】



隣の人からは褒められてばかりだったけど、はじめ考えた俳句で「シュノーケリング」という言葉だけで七文字を使うのは、なんか違うと思ったので「潜り感じる」という言葉を使いました。「海の音 潜り感じる 綺麗な海」という俳句でもいいかなと思っていたけど、海の音は耳で感じるけど、綺麗な海は目で感じるので、対照的で変だと思ったので「水中の 潜り感じる 綺麗な海」にしました。

【生徒作品B】



修学旅行で一番記憶に残っているのは「マリン体験」です。みんなで、全力ではしゃいだことを俳句に残したくて、この俳句を作りました。夢中になって遊んでいるところを、最初は「日焼け忘れた」と表現していましたが、時間が経つのを早く感じているのを表すには、「時忘れ」の方がいいと思い、変えました。

二者ともに、自分が俳句に表現したい思いは何か、その「感じたり考えたりしたこと」を「よりよく」表す言葉は何かを粘り強く試行錯誤している。その過程で、自分の思いを客観的に振り返ったり、言葉と思いを照らし合わせたりしながら、「なにか違う」、「こっ

ちの方が良い」と、自己調整力を発揮しながら「アイディアをかたちに」したことを伺い知ることができる。生徒の作品とメタ言語から、「ICTを用いて創造し、表現する学び」の定義に沿って実践した本単元学習の過程において、「主体的に学習に取り組む」生徒の姿を見て取ることができる。

本単元では、ICTを用いることで、自分たちで撮影した思い出の写真を使うことができる利点があったこともさることながら、俳句を表現する過程においてもICTが効果的に活かされた。すなわち、ICTを用いて、粘り強く言葉を練り、試したり見直したりしながら効率よく試行錯誤できることが、子どもたちの言葉や表現力を掘り起こす。子どもたちの思考が働いているからこそ、自らの学習過程を見つめ直し、言語化することができる。手段としてICTを用いたことによる、学習効果が得られたと言えるだろう。

(4) 生徒の振り返りの記載からの考察

第2回の校内研修会において、「ICTを用いて創造し、表現する学び」の定義を再確認し、先行実践である「実践①」の検証結果をもとに、成果と課題を共有した。それを受け、玉川中学校の全校1～3年生で実践したのが「実践②-1～3」である。どの単元も、「実践①」で効果的であった、「よりよく」「アイディアをかたちに」する仕掛けであるルーブリックを用いた相互評価の場を設けることで、定義に沿った実践に取り組んだ。

以下は、「実践①」、「実践②-1～3」での、生徒が単元後に書いた振り返りの一部である。

・はじめの俳句はムズムズして何か違う感じがしたけど、友だちや先生のアドバイスで納得できる俳句にできて、面白いと思いました。「実践①」

・俳句の説明をするのがとても難しかったです、なぜ自分がこの句を作ったのか再確認することができました。「実践①」

・作っていくうちにだんだん楽しくなって、自分にとっていい図鑑ができたと思いました。「実践②-1」

・これから日本の食文化を伝えていくために、SNSな

どを使って伝えていけば若い世代にも伝わると思いました。「実践②-2」

・東大阪には私の知らない魅力がたくさんあって、こんな魅力がある東大阪を色んな人に伝わってほしいと思いました。「実践②-3」

・自分と友だちで作りたいムービーのコンセプトが違っていたらまともまらなくなるから、意見交換は大事だと思いました。「実践②-3」

「納得できる俳句」「自分にとっていい図鑑」ができたということは、目的意識をもって学びに向かい、「自分なりに表現」できたことに対して、そのうれしさを実感していることである。また、「SNSなどを使って」「色んな人に伝わって欲しい」という表現することの目的意識や相手意識、「意見交換は大事だ」という話し合うことの必然性に気づくなど、教師に指示されたから話し合ったり表現したりするのではなく、生徒自身がその必要感を持って学ぶことができたことが伺える。

そのような目的意識や相手意識、必然性をもった学びであるからこそ、「よりよく課題を解決」しようという意識が働き、その学びを振り返るなかで「なぜ自分が」そのような表現をしたのかを「再認識」し、生徒が表現者としての主体性をもった、自覚的な学びが確立したのではないだろうか。

6 調査・研究協力校の実践Ⅱ

ー 東大阪市立森河内小学校 ー

(1) 校内研究テーマと調査・研究の関わり

森河内小学校は、令和5年度の校内研究テーマを「互いに自分なりの方法で表現し合う力の育成～課題設定・情報収集・整理分析・まとめ表現～」として取り組まれた。互いに自分なりの方法で表現し合う力を育成するための手段として、各教科等において、「ICTを用いて創造し、表現する学び」および「探究のサイクル」(課題設定・情報収集・整理分析・まとめ表現)を学習過程として取り入れられた。

「ICTを用いて創造し、表現する学び」および「探究のサイクル」を取り入れた単元を構成する際、結果と

して、多くの取組みが教科等横断的な単元構成となった。このような校内研究テーマに沿った単元学習を進めるにあたり、調査・研究を共に進めることとした。

(2) 学習単元の概要

森河内小学校が「ICT を用いて創造し、表現する学び」の調査・研究として実践した単元は次の6つである。

【ステージ1 (1学期)】

《実践①》 小学6年 国語科

「防災ポスターをつくろう」

【ステージ2 (2～3学期)】

《実践②-1》 小学2年 生活科

「大きくそだてわたしの野さい」

《実践②-2》 小学1年 生活科

「ひろがれ えがお」

《実践②-3》 小学3年 国語科

「人をつつむ形 ―世界の家めぐり」

《実践②-4》 小学4年 社会科

「自然災害から命とくらしを守る」

《実践②-5》 小学5年 社会科

「情報をつくり、伝える」

これらの「ICT を用いて創造し、表現する学び」の単元学習を進めるにあたり、児童の「主体的に学習に取り組む態度」との関連について、《実践①》を例に、検証したい。

(3) 《実践①》の実際と子どもたちの「主体的に学習に取り組む態度」の考察

本実践①は、調査・研究年間計画の【ステージ1】に位置する。森河内小学校は、全学年1本の研究授業を行ったが、その中の最初の研究授業である。

授業者の指導観は次の通りである。

「事前に未来市民教育の中で、自然災害のメカニズムと災害のこわさについて学習をすることで、国語科だけでなく、未来市民教育とも関係していることに気づ

かせたい。その後、国語科において、ポスター作りの表現の効果（キャッチコピー、見出しの書き方、割り付け、図表やグラフの活用）について学びながら、ポスター作りを行っていく。今回の相手意識は、未来市民教育で防災について学習している4年生とした。防災については学んでいるが、詳しくは学んでいない相手への表現の効果について考えながらポスター作りを行ってほしいと思う。ポスター作りにおいては、紙媒体（模造紙・画用紙・普通紙）、電子媒体（ロイロノート・スクール、コラボノートEX、Keynote）などどれを用いるかは児童自ら選択させる。」（森河内小学校第6学年 国語科学習指導案より抜粋）

以上の記述から、「防災の大切さを4年生に伝える」といった目的意識・相手意識を児童に持たせることを重視した指導を心掛けたことが分かる。また、よりよく課題を解決するために、ポスター作りの手段を、児童自らに選択させたことから、ICTを用いて、自分なりの方法で表現し合う力の育成につなげる意図が伺える。



【写真③】

防災ポスター作りにおいて、紙媒体を選択した児童は少数であった。ほとんどの児童はICTを用いて防災ポスターを作成していた。

ICTを用いてポスターを作成している児童は、ロイロノート・スクールやKeynoteなどを自ら選択し、効果的に活用していた。教師の指導の過程だけではなく、児童にも「探究のサイクル」を意識させた取組みであったことから、児童は、友だちの意見を参考にしながら、自分で学習の進め方について確認し、学習に取り組んでいた。情報収集の場面では、インターネットや書籍、リーフレット等から伝えたい情報を取捨選択する子どもたちの姿があった。【写真③】

児童同士の作成したポスターに対する相互評価の場面では、単元目標「読み手の興味を引くような表現の効果を考えて、書き表し方を工夫することができ。」の要素が入ったルーブリックを用いた。表現方

法は児童によって様々であったが、ポスターを評価する上での視点を明確に持たせることで、児童は、身につけた力を意識して学びを進めていた。【写真④】



ICTを用いたこれらの工夫により、児童は単元を通して「粘り強さ」、「自己調整」といった主体的に学習に取り組む態度を持ち続け、学習活動を進めることができていた。

(4) 児童の振り返りの記載から考察

以下は、「ICTを用いて創造し、表現する学び」の定義に沿って実践されたの児童の振り返りの一部である。

・なるべく4年生に分かりやすくなるように書いた
ので、何回かやり直したりもしたんですけど、まだ直
せるところがあるなあと思って、最後まで見やすくなるように頑張っていました。あとはもう少し先のことを考えて作ることができれば自分的にはいいと思います。《実践①》

・手書きだとロイロノートなどと違って簡単に写真をのせたりすぐに間違いを直すことも難しく、字が多くなってしまうので、次ポスターをつくる時は、ロイロノートです。手書きで作るにしても字数を少なくできれば良いと思いました。《実践①》

・どこの地域の家を調べるか決めて、写真をとることができなかつたけど、たくさん特徴的な家があるんだなと思ったので、次にどの家にするかを決めて、言葉集めをしようと思います。《実践③-1》

・プレゼンテーションをして、緊張したけど、最後までやりとげてうれしかった。優しく聞いてくれて発表しやすかった。《実践③-2》

「最後まで見やすくなるように」「もう少し先のことを考えて」といった記述があることから、粘り強く、

見通しを持って取り組むという意識を持つことができていたことが伺える。

「手書きだとロイロノートなどと違って簡単に写真をのせたりすぐに間違いを直すことも難しく、字が多くなってしまう」と記述した児童は、手書きでポスターを作ったことにより、ICTの良さに気付くことができていた。

「次にどの家にするかを決めて、言葉集めをしよう」と記述した児童は、授業者がグループワークを用いて学習活動を展開したことから、児童が国語科の見方・考え方を働かせ、次時への見通しを持つことができていた。

「緊張したけど、最後までやりとげてうれしかった。優しく聞いてくれて発表しやすかった。」といった記述から、児童に相手意識を持たせて、地域の方との交流会を実施したことにより、達成感を感じ、粘り強く最後までやり遂げることへの喜びを実感することができていた。

このように、児童の振り返りから、粘り強さや自己調整に関する記述が多く見られた。「ICTを用いて創造し、表現する学び」および「探究のサイクル」を手段として用いることが、児童の主体的に学習に取り組む態度および表現力の向上に寄与したと考えられる。

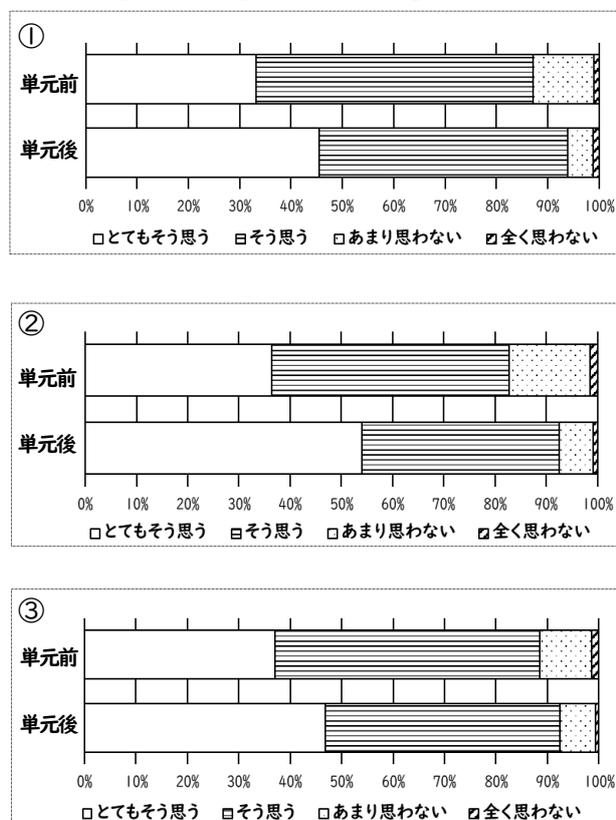
7 アンケート結果からの考察

本稿4(2)に述べたように、「ICTを用いて創造し、表現する学び」の定義に沿った単元と、児童生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の関連を明らかにするための指標として、単元前及び単元後に児童生徒へのアンケートを実施した。アンケートの調査対象は、玉川中学校の《実践①・②-1~3》の学習に取り組んだ1年生~3年生の生徒、森河内小学校の《実践①・②-3~5》の学習に取り組んだ3年生~6年生の児童である。なお、森河内小学校の1・2年生については、アンケート項目内容の難易度が発達段階に対して高いことを考慮し、実施しなかった。

次の(図1)は、「粘り強さ」に関する項目3問、(図2)は、「自己調整」に関する項目3問について、それ

それぞれの回答状況をまとめたものである。

(図1)【「粘り強さ」に関する項目】

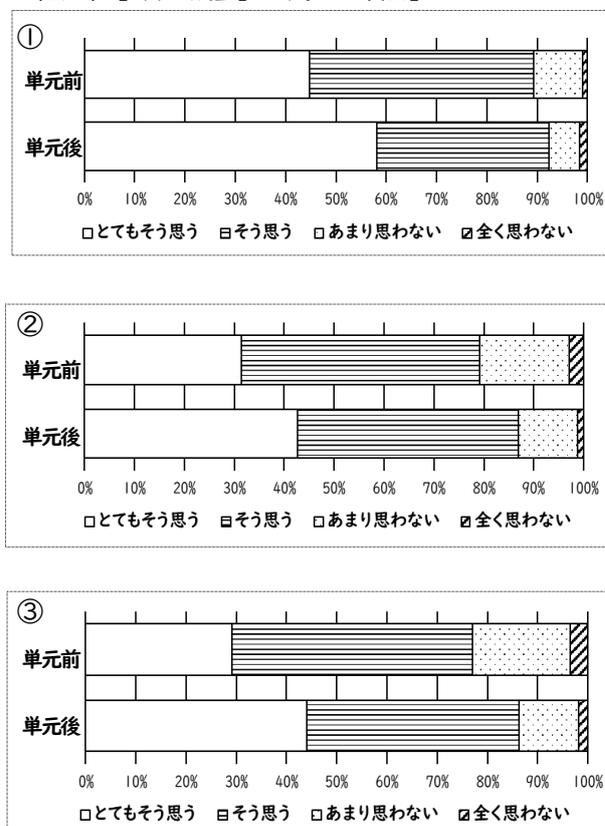


(図1)【「粘り強さ」に関する項目】について、3項目ともに、単元前よりも単元後、つまり、普通の学習よりも「ICTを用いて創造し、表現する学び」の定義に沿った単元学習後のほうが、肯定的回答の割合が上昇していることが分かる。具体的には、「①解決したいことや身につけたい力を意識して学びましたか。」の項目では10ポイント、「③考え方や表現方法がいくつか思いうかんだとき、どれがより適切かを判断しましたか。」では12ポイントの、肯定的回答の割合の上昇が見られた。特に、強い肯定である「とてもそう思う」の割合が最も上昇した項目は、「②難しいことがあっても投げ出さず、最後まで努力していますか(しましたか)。」で、18ポイント上昇した。

こうした結果から、ICTを効果的に活用することで、最後までやり遂げたい気持ちや意欲が高まるとともに、教師によるルーブリックの適切な提示と活用によ

り、児童生徒が目的意識を持ち続けながら「粘り強く」取り組むことにつながったことが分かる。

(図2)【「自己調整」に関する項目】



(図2)【「自己調整」に関する項目】についても、「粘り強さ」の項目と同様に、いずれの項目でも肯定的回答の割合が増加している。具体的には、「①友だちの意見を参考にしながら、自分の考えをまとめたり深めたりしましたか。」では2ポイント、「②自分で学習の進め方について確認しましたか。」では8ポイント上昇し、「③学んだことに対して、他の表現方法がなかったか考えたり、疑問点などを見つけたりしましたか。」では最も高い9ポイントの上昇が見られた。特に、項目③では、単元後に「とてもそう思う」と強い肯定で回答をした児童生徒の割合が15ポイント上昇した。

児童生徒のこうした肯定的回答の結果は、実践I・IIの考察でも述べたように、自分の学習を振り返り、よりよい表現方法がないか試行錯誤する児童生徒の具体的な姿として表れている。

また、この結果が、児童生徒自らが回答したものであることから、「主体的に学習に取り組む態度」の向上について、児童生徒が実感できていると言える。

以上のように、「ICTを用いて創造し、表現する学び」の定義に沿った単元学習を通して、児童生徒が「粘り強さ」と「自己調整」力を発揮しながら学びに向かう「主体的に学習に取り組む態度」が向上することが明らかとなった。

8 調査・研究の成果と今後の展望

令和5年度の研究仮説『「ICTを用いて創造し、表現する学び」を行えば、『主体的に学習に取り組む態度』が向上する。』について、調査・研究協力校の実践における具体的な子どもの姿や成果物、単元前後のアンケート調査結果の指標から、肯定的な検証結果を得ることができた。

学習単元における教師による課題の提示や環境設定の仕掛け、学習過程での子どもたちの学びの具体的な姿に基づいた「主体的に学習に取り組む態度」の検証についてはこれまでに述べてきた通りである。子どもたち自身が自らの学びを「粘り強く取り組めた」「目標に向かって取り組めた」と自覚することができていることは、学ぶことへの意欲や達成感にもつながっているだろう。また、この成果は、ICTを用いることでこそ得られたものであると考えられる。手段としてのICTの良さを子どもたち自身が実感することができたとと言える。

さて、本稿「はじめに」でも述べたように、今年度の調査・研究では、「非認知能力」の涵養との関わりについて検証することもねらいとしていた。子どもたちが「主体的に学習に取り組む」過程で「粘り強さ」と「自己調整」力を発揮しながら、どのような「非認知能力」を培っていたか、検証してみたい。

1つめは、子どもたちの自己評価力が培われたのではないかということである。子どもたちは、「よりよく課題を解決」したいという目的意識や相手意識を持ち、「感じたことや考えたこと」を、その目的に向かって「自分なりに表現」しようと学びに向かった。ICT

を用いて試行錯誤しながら「よりよい」表現を模索する過程で、子どもたちは絶えず価値判断し、自己決定している。そして、「アイデアをかたちに」したいという目標と評価の観点を共有し、同じ思いを抱いて取り組んでいるからこそ、クラスメイトとの相互評価が、単なるアドバイスや指摘ではなく「対話」となる。この対話は、他者との対話であるとともに、教材や課題との対話、自己との対話でもある。玉川中学校「実践①」の【生徒作品A】に「隣の人からは褒められてばかりだったけど(中略)なんかちがうと思ったので…」という生徒の記述があった。これは、相互評価をきっかけに、自ら進んで作品を客観的に見直した。つまり、自己評価をし、「なんかちがう」と感じて、「よりよい」表現に練り直すことにしたのである。子どもたちが「自己調整」する姿とは、このような自己認識と自己評価を経て、発揮されていた姿だと言える。

2つめは、協調性の向上である。これまで検証してきたとおり、「自分なりに表現」するとは、決して独りよがりなものではない。教科等の見方・考え方に基づいた評価指標があり、「よりよく課題を解決する」目的意識と相手意識がある。森河内小学校「実践①」の振り返りには、「なるべく4年生に分かりやすくなるように書いたので、何回かやり直したりもした」という児童の記述があった。相手に理解してもらえる表現の仕方を模索したことが、相手に応じた「自分なり」の自己表現につながっている。まさに、協調性をもった他者との関りの中で生きる表現力が育まれていると言える。

3つめは、知的好奇心の育みである。子どもたちが「粘り強さ」や「自己調整」力を発揮するには、「よりよく課題を解決」したいという学びの必然性をもつことが必要である。そのために教師は、課題設定や環境設定を工夫したことはこれまでも述べてきた。実践を終えた子どもたちのふりかえりには、粘り強さ等に関わる記述の他に、「納得できる俳句にできて、面白い」(玉川中学校「実践①」生徒振り返り)、「次ポスターをつくる時は、ロイロノートでする」(森河内小学校「実践①」児童振り返り)といった、学びへ

の興味・関心や次回への学習意欲に関する記述も見られる。この児童生徒は、「ICTを用いて創造し、表現する学び」の学習に取り組んでいるうちに、知的好奇心がくすぐられ、わくわくしながら学びに没頭していたのではないか。他の表現方法も試してみたいという思いは、「よりよい」表現を模索する中で、思い浮かんだいくつかの表現は否応なく捨てざるを得なかったという取舍選択の経験ゆえに生まれたものだとも考えられる。

こうした能力は数値化することはできないが、児童生徒の姿や言葉から、「ICTを用いて創造し、表現する学び」を通して、「主体的に学習に取り組む態度」が向上するとともに、非認知能力をも確かに育てていたと言えるのではないか。

一方で、単元後のアンケート調査の結果として、約1～2%の否定的回答の児童生徒が含まれていることは否めない。単元の学習で、「粘り強く」「自己調整」しながら取り組めたとは「まったく思わなかった」、つまり、学びの実感を持つことができなかったのである。このような児童生徒への支援として、学習への動機づけや取組みの支援もさることながら、学習過程において教師が効果的な形成的評価をすることも肝要である。令和6年度東大阪市教育フォーラムにてご登壇いただいた独立行政法人教職員支援機構理事長荒瀬克己氏は、講演の中で「評価とは、相手への応援でなければならない」(2024.1.27 講演「これからを生きる子どもたちに」より)と述べられた。子どもの学びを共に喜び、価値づけ、応援することで、子どもが学びを実感できるように寄り添うこと、つまり、教師が、子どもの学びの「伴走者」としての役割を果たすことが求められている。

「ICTを用いて創造し、表現する学び」の学習を通して粘り強さと、自己調整力、非認知能力を育みながら、「アイデアをかたちにする」創造力が培われたことであろう。もちろん、こういった資質・能力が、一朝一夕に身に付くものではないことは言うまでもない。しかし、このような学習をしたという経験そのものが、子どもたちの自信につながり、VUCAと呼ばれ

る予測困難な未来社会の中で課題に立ち向かい、前に踏み出そうとする推進力となっていくものであると信じている。

今年度は、学校単位での調査研究を進めることができた。小学校から中学校までの全学年での実践から「ICTを用いて創造し、表現する学び」の定義に沿った単元デザインと実践によって、その効果を実証できたことが大きな成果である。この実践と考察を活かし、市内に展開していきたい。

また今後は、子どもたちが更に課題を自分ごととして捉え、粘り強く学習に向かう過程で思考力・判断力・表現力等を発揮し、「アイデアをかたちに」する創造力を育む学習の在り方を検証していきたいと考える。